

ホタルの文化昆虫学研究史 ー全国ホタル研究会誌を例としてー

井口 豊

〒394-0005 長野県岡谷市山下町 1-10-6 生物科学研究所

iguchi.y@lab.ivory.ne.jp

全国ホタル研究会誌 51: 6-8 (2018)

History of the cultural entomology of fireflies: A historical review of Proceedings of the Japan Association for Fireflies Research

Yutaka Iguchi

iguchi.y@lab.ivory.ne.jp

Laboratory of Biology

Yamashita-cho 1-10-6, Okaya City, Nagano Prefecture, 394-0005, Japan

Zenkoku Hotaru Kenkyukai-shi (Proceedings of the Japan Association for Fireflies Research) 51: 6-8 (2018)

Abstract

The number of articles on the cultural entomology of fireflies published in Zenkoku Hotaru Kenkyukai-shi (Proceedings of the Japan Association for Fireflies Research) has increased since the late 1990s. Since the Convention on Biological Diversity Strategy came into effect in 1993, the recognition of the importance of biological diversity has been enhanced, which may have led to the increase of number of articles on the cultural entomology of fireflies.

ホタルの文化昆虫学研究史 ー全国ホタル研究会誌を例としてー

井 口 豊* (長野県岡谷市)
IGUCHI, Yutaka (Okaya, Nagano Pref.)

(Keywords : 文化昆虫学、ホタル、全国ホタル研究会誌、生物多様性保全)

1. はじめに

文化昆虫学と言うと、まだ一般の人々には馴染みの薄い用語かもしれない。日本の文化昆虫学の第一人者である高田兼太によれば、文化昆虫学とは、昆虫そのものではなく、昆虫とかかわる人類とその社会および文化を研究対象とする学問である (高田, 2014)。

ホタル類の場合もまた、高田の定義が当てはまると私は思っている。ホタルの文化昆虫学的研究と言われて、まさきに私に思い浮かぶのは、高校時代の恩師でもある三石暉弥の著書「ほーほーホタル来い」(三石, 2002) である。副題が、『「ホタル狩りの唄」を追って』となっていて、本の内容も察しがつくことであろう。ホタルを愛する人々には、是非、一読してほしい著作である。

学術研究として、国内外のホタルの文化昆虫学文献を調査し、総説として書かれたものが、前述の高田による「甲虫と人類の文化ーホタル科の文化昆虫学概説」(高田, 2011) である。これは、日本甲虫学会の和文誌であるが、インターネット上で公開されているので、多くの人々に是非読んで頂きたい。

全国ホタル研究会誌にも、ホタルの文化昆虫学的研究が見られる。遊磨・後藤 (1999) による「文化昆虫ホタルー古典の中からー」が、その典型であり、前述の高田 (2011) にも引用されてい

る優れた文化昆虫学的研究である。

Takada (2010) によれば、数ある昆虫類の中でも、日本人にはホタルを特別好む傾向がある。しかし、それゆえにホタル類、特にゲンジボタルの安易な移入が行なわれてきたのも事実である (Iguchi, 2009 : 井口, 2009)。最近では、中学校で、ホタル移入を外来種問題として生徒に考えさせる授業が現われてきた (山野井ほか, 2016)。初等・中等教育におけるこのような授業は、極めて重要であり、可能ならば、文化昆虫としてのホタルの意義も合わせて考えさせる授業を進めていってほしいと思っている。

全国ホタル研究会では、これまでホタルの生物学的研究が数多く発表されてきた。本研究では、その中でも文化昆虫学的な研究がどのくらい発表されてきたのか、その歴史的経過をデータにして探る。

2. 方法

全国ホタル研究会誌に掲載された報文数を、2017年の50号まで、文化昆虫学的なテーマを扱ったものと、それ以外に分けて数えた。ここでは、ホタル関連ではあるが、ホタルの生物学的研究ではない報文を文化昆虫学報文として数えた。ただし、単に地域行事を紹介しただけの場合は、文化昆虫学とはみなさなかった。

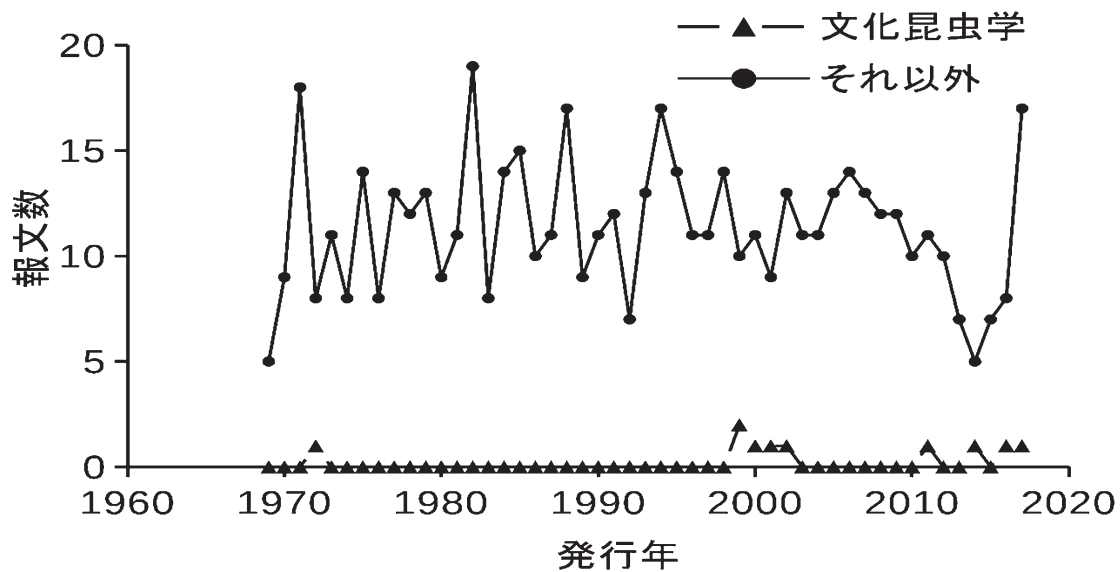


図1 全国ホタル研究会誌に掲載された文化昆虫学とその他の報文数の経年変化

3. 結果及び考察

図1に、全国ホタル研究会誌に掲載された報文数の推移を示した。2006年以降、全体的に論文数が減少傾向なので、多くの会員に投稿を促したい。観察データを紹介するだけ、あるいは、知りえた情報を掲載するだけでも、貴重な研究資料となりうるのである。2017年の報文数は、それ以前と比べて、かなり増加しているが、これは会誌に地元発表と分科会の抄録が掲載されたためである。このような雑誌編集上の取り組みも進めて欲しい。

ホタルの文化昆虫学の報文数は、会誌1号当り、1～2編と少ないが、1990年代後半から、ほぼコンスタントに掲載されるようになってきた。偶然ではあるが、日本が生物多様性条約を締結したのが1993年であり、その頃から、生物多様性保全の重要性が認識されるようになってきた（井口，2009）。ホタル類の多様性保全を推進していく上でも、私たちの社会とホタルがどのような関わりをもっているか、様々な角度から論考が必要となるものと思われる。その意味でも、先ほど述べたように、ホタルの生物学的研究だけでなく、漫画やアニメ、キャラクターグッズや商品パッケージ

など、身の回りで見られたホタル関連の情報を本誌に積極的に紹介してほしい。それが貴重な研究資料になりうることを再度、強調しておきたい。

4. 参考文献

- Iguchi, Y (2009) The ecological impact of an introduced population on a native population in the firefly *Luciola cruciata* (Coleoptera: Lampyridae). *Biodiversity and Conservation*, 18: 2119-2126.
- 井口豊（2009）ゲンジボタルの移入問題. 全国ホタル研究会誌, (42): 35-38.
- 三石暉弥（2002）ほーほーホタル来い：「ホタル狩りの唄」を追って. 川辺書林. 252p..
- 遊磨正秀・後藤好正（1999）文化昆虫ホタル～古典の中から～. 全国ホタル研究会誌, (32): 10-16.
- Takada, K. (2010) Popularity of different coleopteran groups assessed by Google search volume in Japanese culture-extraordinary attention of the Japanese to “Hotaru” (lampyrids) and “Kabuto-mushi” (dinastines) (Cultural entomology). *Elytra*, 38: 299-306.

高田兼太（2011）甲虫と人類の文化 ― ホタル科
の文化昆虫学概説. さやばねニューシリーズ,
2 : 25-31.

高田兼太（2014）文化昆虫ホタル～古典の中か
ら～. きべりはむし, 36(2) : 26-27.

山野井貴浩・佐藤千晴・古屋康則・大槻朝（2016）.
ゲンジボタルの国内外来種問題を通して生物多
様性の保全について考える授業の開発. 環境教
育, 25(3) : 75-85.

* 生物科学研究所